万景台

万景台

万景台（マンギョンデ）は昔から、平壌（ピョンヤン）8景とともに名勝として知られている。

万景峰は周辺の峰々のうちで一番高く、その上に立つと四方のよろずの景勝が一望のもとに見渡せるとしてその名がある。万景峰の麓にある村も万景台と呼ばれるようになった。

万景台には、偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席が誕生して幼年時代を送り、一家の人たちが代々暮らしてきた藁葺き家と、主席が幼年時代に心身を鍛えたすべり岩、軍艦岩、相撲場などが保存されている。

朝鮮人民と世界の進歩的人民は、金日成主席の革命活動史と革命的家庭についてより深く認識するために万景台を訪れている。外国の友人たちは万景台を見学して、「万景台は偉大な太陽が昇った所」「万景台は人々を真の革命家、不屈の闘士に育て上げる革命の学校」とたたえている。

チュチェ1(1912)年4月15日、金日成主席が
誕生した万景台の生家

解放前の万景台

解放前の万景台は20余戸の農家がある小さな村落であった。

平壌城で農業に従事していた金日成主席の曽祖父・金膺禹(キムウンウ)先生は、暮らしが立たないので地主の墓所を管理することにして墓守りの家を一軒世話してもらい、1860年代に万景台に移った。

金日成主席はチュチェ14(1925)年、国を取り戻す大志を抱いて故郷の万景台を後にした。

チュチェ34(1945)年8月15日、朝鮮を解放した金日成主席は20年ぶりに万景台に帰った。

チュチェ34(1945)年10月14日、祖国の人民の前で凱旋演説を行った主席は、20年ぶりに故郷の万景台を訪れた。

主席一家はみな朝鮮の独立のために万景台の家を後にしたが、祖国を解放して帰ったのは一人金日成主席だけである。

しおり戸の外まで走り出て主席の懐に抱かれた祖母は、「父さんや母さんをどこへ残して一人で帰ってきたんだい…　どうして一緒に帰れなかったんだい」と言って熱い涙を流した。

とっつきの部屋

柱時計

金日成主席は回顧録『世紀とともに』で次のように述懐している。

「わたしが万景台で幼年時代をすごした時、祖母は家に時計がないのをいつも嘆いていた。祖母は物欲のない人だったが、他人の家の柱時計だけはたいへんうらやましがった。近所に柱時計のある家が一軒あった。

祖母がその家の柱時計をうらやんだのは、父が崇実（スンシル）中学校に通いはじめたときからだという。家に時計がないので、祖母はいつもうたた寝をしては朝早く目をさまし、およその時間をはかっては急いでご飯を炊いた。万景台から崇実中学校までは12キロもあるので、早くから炊かないと遅刻するおそれがあったのである。

ときには、夜中にご飯を炊きながらも、登校時間かどうかわからないので、何時間も眠れずに台所で東の窓ばかり眺めているようなこともあった。そんな日には、祖母が母に『隣へ行って何時か見てきておくれ』と頼んだりした。

隣家へ行っても母は主人を起こすのがはばかられて、庭に入らず垣根の外にうずくまって、時計が時間を告げるのを待った。そして、その音を聞くと家へ帰って祖母に時間を告げたものだった。

わたしが八道溝から故郷に帰ったとき、叔母が父の安否を尋ねたあと、そんな話を聞かせてくれたのである。そして、お父さんは遠い道を通学して苦労したけれど、成柱（ソンジュ）はチルゴルのお母さんの実家に行くことになったそうだから、学校が近くていいわね、というのだった。

わたしの家では、解放の日まで、祖母があんなにうらやましがっていた柱時計をついに買えずじまいだった」

とっつきの部屋

奥の部屋

台所

主席の一家が利用した農具や家財道具

納屋

高床の小屋

いびつの甕

1874年、金日成主席の曾祖母は、生活があまりにも貧しくて、他人は目も向けず、買いもしないいびつの甕を一番安い値段で買ってきた。

曾祖母は、いびつの甕を買う時人々は嘲笑ったが、自身の目からは血の涙が流れた、今後、この甕のそばに見栄えのよい甕をおいて、この胸の痛む話を昔話のように追憶しながら暮らせる日は必ず来るだろう、と語った。

井戸

松の木とヤチダモの木

金日成主席は幼年時代、虹をつかもうとして、たびたびこの松の木とヤチダモの木に登った。

すべり岩と軍艦岩

　金日成主席は友だちと共にすべり岩に乗って身心を鍛え、軍艦岩で兵隊ごっこをしながら英知と勇猛を培った。

すべり岩

軍艦岩

相撲場

金日成主席はここで友だちと相撲をとりながら身体を鍛え、知恵を培った。

相撲場

泉の場と学習の場

金日成主席は、しばしば父と一緒に泉の場で泉水を飲んだり、冷水摩擦をしたりしながら身心を鍛え、学習の場で本を読みながら革命の大志を育んだ。

泉の場

学習の場

釣り場

金日成主席は彰徳(チャンドク)学校時代、万景台に来るとこの釣り場で学友や村人たちを啓蒙した。

釣り場

毎年、数多くの朝鮮人民や海外同胞、外国人が万景台を訪ねている。

編集・文：金国哲
写　　真：邊讃友、共惟日、偉東明

万景台

発　行：外国文出版社
発行日：チュチェ110(2021)年10月